

第11回 日本心筋症研究会 ご報告

渡辺 昌文

第11回 日本心筋症研究会
会長

日本心不全学会 会員各位

このたび2025年5月10日に山形県天童市で、第11回日本心筋症研究会を無事に開催できましたことに御礼申し上げ、ここに概要をご報告いたします。本研究会は、地方開催ではありましたが、全国から約290名の先生方にご参加いただき、終日にわたり活発な討論が行われました。近年、心筋症・心不全診療は、診断技術や治療選択肢の拡大により高度化し、個々の患者に対する判断はより複雑になっています。本研究会では、こうした背景を踏まえ、新しい知見を学び、それらをどのように診療に組み込み、患者の長期的な転帰や生活の質の向上につなげるかという点に、多くの議論が向けられていました。

シンポジウム1では、ゲノム分子病理に基づく心筋症の精密医療をテーマに、全ゲノム解析やバイオバンクと連携した解析基盤の構築と臨床への情報還元、肥大型心筋症におけるリスク層別化、病理学的解析や空間オミックス解析を統合した新たな病態理解が概説されました。遺伝情報を診断確定にとどめるのではなく、治療選択、長期予後管理、さらには家族管理へとつなげていく視点が強調され、希少難治性心筋症に対する個別化医療や、地域医療における遺伝子診療の実践と施設間連携の重要性が示されました。とくに、研究段階の知見をどの時点で臨床判断に組み込むべきかという点について、事例を交えながら具体的な課題と今後の方向性が提示されました。

シンポジウム2では、心筋症のイメージングとバイオマーカーを中心に、心アミロイドーシスを含む多様な病態を念頭に置いた多面的評価の意義が示されました。

心エコー、CT、MRI、PET/MRによる組織性状評価や左室内血流動態解析に加え、血中エクソソーム解析など非侵襲的バイオマーカーの可能性が提示され、診断精度の向上のみならず、予後予測や治療反応評価への応用が今後の診療を大きく変え得ることが確認されました。実臨床でも、単一モダリティに依存せず、複数の情報を統合して解釈する重要性が示されました。

シンポジウム3では、心筋症と心不全の進行期・重症期治療として、心臓移植とdestination therapyとしての植込み型補助人工心臓の現状と制度的変化が整理されました。さらに、iPS細胞由来心筋を用いた再生医療の臨床応用の到達点、僧帽弁や三尖弁逆流に対する経カテーテル弁修復術や、重症心不全に対するImpellaの適応と可能性、植込み型補助循環デバイスの改良と残された課題が議論されました。救命のみならずQOLや社会復帰、長期転帰を見据えた、病期に応じた包括的な治療戦略が示されました。

シンポジウム4では、肥大型心筋症を対象に、不整脈に対するアブレーションやデバイス治療、難治性不整脈に対する心臓定位放射線治療の可能性が提示されました。選択的心筋ミオシン阻害薬の登場により、従来の薬物治療やPTSMA治療の位置づけを含め、治療戦略そのものを再考する時代に入ったことが示され、今後の診療アルゴリズムの変化が強く示唆されました。加えて、薬物治療の効果判定や導入時期、侵襲的治療との適切な使い分けをどのように判断するかといった、日常診療に直結する課題についても概説がありました。

シンポジウム5では、心筋炎、心臓サルコイドーシス、ミトコンドリア異常、心アミロイドーシス、がん治療

関連心筋障害などの二次性心筋症が取り上げられました。診断の難しさに加え、原因検索と介入のタイミングが予後を大きく左右する点が改めて提示され、国内レジストリを基盤としたエビデンス創出と基盤病態解明の重要性が確認されました。さらに、多様な二次性心筋症に共通する診療上の視点を整理する意義が示されました。

特別企画では、遺伝子検査と遺伝子カウンセリングに焦点を当て、心筋症診療における遺伝学的検査の実践と実施戦略が示されました。遺伝子検査は診断や治療選択、家族管理に有用である一方、病的意義不明のバリエーション(VUS)を含む結果の解釈や説明には高度な臨床遺伝学的専門性が求められること、患者・家族との継続的な対話が不可欠であることが改めて確認されました。保険収載後の実臨床を見据えた多職種連携体制の構築が、今後の質の高い心筋症診療の鍵となることが提示されました。

若手研究者によるYIAセッションやポスター発表においても、基礎・臨床双方から質の高い研究が数多く提示されました。表彰者を別途、ご紹介します。循環器という学問や診療の将来を担う世代が着実に育っていることを実感しました。

最後に、ご登壇いただいた先生方、運営に携わってくださった皆様、そしてご参加いただいた会員の皆様に、心より感謝申し上げます。日本心筋症研究会が会員の皆様にとって実り多い学術交流の場であり続けるよう、祈念しております。

敬具

YIAセッション 臨床

最優秀演題

泉田 俊秀
東京大学医学部附属病院 循環器内科
「核膜関連筋疾患を合併したラミン心筋症による重症心不全の長期予後と臨床経過の特徴」

優秀演題

九山 直人
熊本大学大学院生命科学研究部 循環器内科学
「右房機能低下はトランスサイレチン型心アミロイドーシス (ATTR-CM) における心房細動」

YIAセッション 基礎

最優秀演題

森下 優
大阪大学 大学院医学系研究科 循環器内科学
「DMPK 遺伝子CTGリピート伸長を再現する筋強直性ジストロフィー1型(DM1)モデル細胞の構築と不整脈病態解明」

優秀演題

渡邊 雅嗣
九州大学大学院医学研究院 循環器内科学
「リン脂質代謝により誘導される過剰な HIF-1 α は cytopathic hypoxiaを介して敗血症性心筋症を引き起こす」